

「この度、三月末日をもちまして、〇〇市立〇〇中学校を最後に定年退職いたしました」ある方から挨拶状をいただいた。転勤の挨拶ではない。定年退職の挨拶である。

このM先生は、もともとはいわゆる一流企業で働いていた。それが、教員採用試験を受け、中学校の社会科の教員となった。そして、私が勤務していた中学校に初任者として赴任してきた。その頃、私は小学校から2校目の勤務校となる中学校に移っていた。30歳ぐらいだった。

M先生は、私よりも年上だった。企業で活躍していたので、一般の教員とは違った視点をもっていた。それが、非常にためになった。「教員の常識は世間の非常識」という言葉がある。学校という狭い空間しか知らない教員にとっては、この言葉の意味は理解しにくいだろう。M先生は、この言葉の意味がよくわかっていたと思う。

たまたまではあるが、M先生との出会いによって、多くのことを学ぶことができた。社会科の授業を一緒に考えたこともあった。今でも覚えているが、M先生が研究授業を行うために学習指導案を作成したことがあった。ありがちなことだが、50分間の中に、ねらい、めあてが2つあった。なおかつ、内容が盛りだくさんだった。あれもやろう、これもやりたいという思いが強ければ強いほど、こうなりがちである。

教材研究の最終段階は、そぎ落とすことである。本当に大切なこと、ポイントがわかっていないと、削るという作業は難しい。授業者としては、あれもやった、これもやったと思っている。しかし、生徒からすると、いろいろやったが結局何だったのかよくわからないということがある。授業者の自己満足で終わることがある。

M先生は、学習指導案を修正して授業に臨んだ。企業で活躍していたとはいえ、教員としては1年目である。にもかかわらず、授業は一定のレベルに達していたと記憶している。授業の目線が生徒寄りなのである。そもそも、あの頃の私にどれほどの授業を観る目があったかはわからないが。

M先生は、陸上特に駅伝などの長距離の指導にも長けていた。部活動の指導でも多くの実績を残している。きっと授業と同様に、ポイントがわかっているのである。加えて、教育愛に溢れている。それが、生徒に伝わっているのだと思う。

M先生は、定年まで一教員として生徒のすぐそばにいた。これは、教員を目指したときから決めていたことだろう。退職後のこの4月からは、午前中に社会科の授業を行い、午後は部活動指導員として陸上、駅伝競技に関わるそうである。このような先生が、退職後も、今までの経験を生かし、多くの生徒の指導に携わる機会があることは、教育界にとってプラスになると思う。

M先生が、生き生きと授業を行い校庭で躍動している姿が思い浮かぶ。それは、20数年前と何も変わらないはずである。M先生は、そういう方である。

「高澤先生、初任が〇〇中で本当に良かったと思っています。ありがとうございます」と書かれてあったが、これは違う。「M先生、私の学校に来てくださってありがとうございます」である。私にとって、若い頃の大切な出会いの一つである。